

東野圭吾論

和田 勉

一

純文学と大衆文学といった枠組みにとられずに現代日本文学を概観すると、東野圭吾は極めて多くの読者に支持されている作家の一人として注目すべきであると言える。推理とサスペンスの作家として捉えられがちだが、近年では同時代の生命科学等の研究成果も積極的に取り込んでいる。このような東野作品を分析することによって、現代日本文学の状況について新たな視座を提示したい。

東野の作品を生命科学の視点から分析するが、特にそれはつきりと表出されている『カッコウの卵は誰のもの』（平22、光文社）と『プラチナデータ』（平22、幻冬舎）を中心に考察する。生命科学の真実を作品に取り込むことにより、文学作品としてどれほどリアリティを獲得しているかということの検証も行いたい。そのことが、作品評価の鍵も握っているだろう。

これらの二作品の他にも、『分身』（平5、集英社）でも生命科学の要素が取り込まれている。氏家鞠子と小林双葉は、双子の試験管ベビーで、しかも別々の女性を代理母としたと設定している。鞠子が父の書斎に入る場面では、「私は父がどのようなことを研究しているか、殆ど知らない。横からファイルの背表紙を読んでみた。『哺乳類の核移植に関する研究Ⅰ』『受精卵からの核除去法』『核移植卵の発生分化停止の原因と解決』『成体細胞の段階的核移植によるクローニング』何のことだから全然わからない。ただ受精卵だとか細胞だとかの言葉が混じっていると、何となく不安な気持ちになってしまう。神聖で、人間が触れてはいけない領域に関わっているような気がするからだ」とある。『分身』では、現代医学の知見を踏まえながら、鞠子と双葉の数奇な運命がドラマチックに展開される。事件に絡めた推理小説じみた設定としているために少し不自然なところもあるが、クローンというテーマ自体は現代的である。「鞠子の章」と「双葉の章」を交互に書き分けるという構成は、DNAの二重螺旋構造を連想させる。本作では、クローンの双子を通して唯一無二の存在としての個人が揺るがされる怯えが描かれている。

また『時生』（平14、講談社）の冒頭部には、「グレゴリウス症候群は、一九七〇年代初期にドイツの学者によって発見された遺伝病だ。脳神経が次々に死滅していく病気で、大抵は十代

半ば頃までは何の兆候も見られないが、その頃を境に症状が現れる。(中略)世界でも例が少なく、治療法は見つかっていない。遺伝病ではあるが、その因子を持つ人間が必ず発症するわけではない。判明しているのは、欠陥遺伝子がX染色体に乗っているということだけである。この種の病気は伴性遺伝病と呼ばれる。発症するのはまず男性であり、女性に患者は少ない。それは女性はX染色体を二つ持っているが、男性は一つしか持っておらず、そこに乗った欠陥遺伝子の故障を埋め合わせられないからだ」とある。二十歳の時生はグレゴリウス症候群に侵されて、まさに臨終が近かった。父拓実は妻麗子に、自分の若い頃に「トキオ」と名乗る息子が会いに来たと告げる。麗子がグレゴリウス症候群のキャリアであるため、時生の誕生については大きな責任が生じることになる。難病の遺伝子を持った子供が生まれてくる可能性のある者は、子供を作ってはいけないのかという痛切な問いかけにつながる要素がある。しかし、この導入部は、その後の父拓実の青春時代を共に生きるトキオとのドタバタ喜劇めいた展開と有機的につながっているとは必ずしも言えない。タイムトラベルしたトキオが、父の青春時代を共に生きる痛快な青春小説という形でまとめたところに本作の特質はあるのだろう。

東野は大阪府立大学工学部電気工学科を卒業した理系出身の小説家である。随筆『さいえんす?』(平7、角川書店)では

ミステリーと最先端科学について考察している。本書の「科学技術はミステリーを変えたか」の中で、「科学技術の進歩によって文学がどのように変わったか、というテーマでエッセイを書こうと思ったが、それではあまりに荷が重いので、『文学』を『ミステリー』に置き換えることにする。よく考えてみたら、デビュー以来十七年、文学性なんてものを意識したことは殆どないのだ。それらしき言葉を口にしたことはあるが、じつはその本当の意味がよくわかっていない、というのが実状である」と述べている。ここには作者の謙遜が窺えると共に、作者の本音も垣間見える。理系出身の作家であるゆえに、いわゆる文学というもののへのコンプレックスも窺える。東野作品はストーリー展開の巧みさの一方で、心理描写には乏しい。そこには、いわゆる心理描写中心の近現代小説への批評意識も窺える。純文学だと内面が丁寧に描かれているかどうかですがすぐに問われかねないが、推理小説だとストーリー展開をメインにすれば良いという考えであろう。これはただ叙述の方法の問題ということには留まらず、文学観そのものに関わることであると言える。

同書の「疑似コミュニケーションの罨」の中には、「MHC」という名称を耳にしたことのある人は少なくないかもしれない。一時、テレビなどでも取り上げられたからだ。日本語では、主要組織適合性複合体ということになる。白血球などにあるタンパク質を作る遺伝子の複合体だ。このMHCは何万通り、も

しくはそれ以上の種類があり、人によってタイプが必ず違っているといても過言ではない。(中略) 肝心なのはその類似性で、人は自分とMHCタイプの似ていない異性に惹かれるらしい。いわゆる、生理的に好む、ということだ。なぜそうなるかという、MHCのタイプによって病気などに対する免疫力の質も変わる、自分と違うタイプの相手と結ばれたほうが、子孫の免疫力がバラエティに富むからだと考えられている。つまり、優秀な子孫を残したいという本能の成せる技なのだ。そんなことからこのMHCは、恋愛遺伝子と呼ばれる場合もある」と述べている。恋愛感情にも遺伝子が密接に関わっていることに言及している。恋愛小説を書く場合にも、このような予備知識がある東野のような作者とそうでない作者では、自ずと違いが生じるであろう。

東野が現役作家で大衆文学的であるため、先行研究としては東野作品研究会編『東野圭吾の謎』(平21、データハウス)が挙げられる程度である。この本にしても、本格的な専門書というようなものではなく、むしろミステリーの謎解きに主眼が置かれている。その他に別冊宝島編集部編『僕たちの好きな東野圭吾』(平21、宝島社)、上野建司・品川亮編『もつとー東野圭吾』(平22、INFASパブリケーションズ)、井上裕務編『東野圭吾全小説ガイドブック』(平23、洋泉社)、東野圭吾作家生活25周年祭り実行委員会編『東野圭吾公式ガイド』(平24、講談社)

等が刊行されている。ただし、これらの著書も概略的、入門書的な内容で、研究が進展しているとは言えない。時代の寵児である東野を文学研究の対象として扱うことは、出版界や社会における影響力の大きさを考えると十分な意義があると考えられる。

東野作品が内包しているテーマや問題意識について考察し、物語としての独創性の内実を明らかにしたい。東野作品に心理描写に乏しいところがあるのは否定できないが、心理描写に代わる別種の現代小説としての方法を独自に開拓し得ているかどうかということについても検証したい。

二

『カッコウの卵は誰のもの』について生命科学との関わりという視点から考察したい。それだけでなく、作品のテーマや意義や評価等にも言及したい。

『カッコウの卵は誰のもの』では、スキ一の元日本代表緋田と娘風美が親子二代のトップスキーヤーであることに焦点が当てられる。風美が所属するチームの研究者柚木は、スポーツ選手の才能を科学的に発掘する方法を解明するために、緋田親子の遺伝子パターンを調べたいと伝える。柚木は緋田宏昌に、「我々と同様の研究は世界中で行われていて、運動能力に関係

するとみられる遺伝子も、すでに何十個と見つかっています。ただし、どの遺伝子がどの程度に影響するのか、ということまでは解明できていないのが現実です。速く走るというだけのことで、単に瞬発力が大きければいいというものではありません。そこにはテクニクが関与し、脳内物質が影響してきます。バランス感覚、リズム感も無視できません。球技や格闘技になると、さらに複雑でしょう。どんな遺伝子をどのように組み合わせれば、どんな運動に適した身体になるのか——それを突き止めるのが最大の課題といえます」と述べる。しかし、娘の出生の秘密をかかえる緋田からは、風美の遺伝子を研究することを頑なに拒まれる。

柚木は新世開発スポーツ科学研究所で働いており、スポーツ遺伝子を研究している。作品中には、「大学の准教授だった柚木が副所長として招かれた大きな理由は、彼の研究テーマが、研究所が推し進めているある計画に有効だと判断されたからだった。その計画とは、スポーツに向いている人材を遺伝子から発見し、早期に最適な指導を施すことで優秀な選手を育成する、というものだ。(中略) この技術が確立できれば、ものすごいビジネスになる。かつて、ドーピング技術が高額で取引されたのと同じだ。違うのは、ドーピングは違法で選手の運命を狂わせるが、遺伝子による才能の発掘は適法であり、選手の未来を明るく拓くという点だ」とか、「すでに柚木たちのグルー

プは、明らかに有意差があると思われるパターンをいくつか発見していた。その一つが緋田風美らが持つFパターンなのだが、もう一つ、注目しているものがある。それは柚木たちがBパターンと呼んでいる組み合わせだった。そのパターンを持っている人間は、体内で極めて効率的なエネルギー変換ができるため、結果的に筋持久力や心肺能力が高くなるのだ。競技をするならば、中長距離走、自転車、クロスカントリイなどが適している」とある。柚木はFパターンの緋田父娘だけでなく、鳥越克哉と伸吾の父子をBパターンの持ち主としてマークし、伸吾を育成することになる。柚木の仕事は優れたスポーツ遺伝子の持ち主を調べ、その血縁者に英才教育を施すことである。ただし、柚木は仕事を忠実に遂行するだけの人物として造形されていて、内面的な深みには欠ける面がある。もともと、それはデータを重視して研究に専念する学者タイプの人物、あるいは成果を出すためには手段を選ばない企業人タイプの人物と捉えると納得できるところもある。

登場人物の「緋田」には、運命の赤い糸に非ずということが寓意されているだろう。それは、娘の素性を隠している人物にふさわしい命名でもある。娘の「風美」はスキートの選手らしく風を切って走る美しさを備えており、スポーツ選手特有の頑健な身体と素直な性格の持ち主である。また「伸吾」には、遺伝子に秘められた吾の才能を伸ばすということが寓意されている

だろう。伸吾とは対照的な存在として、生まれつき心臓が弱いフジイが配置されている。なお、緋田はついに娘風美に出生の真実を打ち明けることはないが、鳥越克哉は息子伸吾にバス事故の真実を打ち明けることになる。

『カッコウの卵は誰のもの』の雑誌初出時のタイトルは「フェイク」で、単行本化に際して改題されている。「フェイク」とは偽物、模造品を意味するが、この題には本人の能力や努力ということよりも、遺伝子によって発掘された模造の才能ということが寓意されている。更に人間関係で見れば、緋田宏昌は実の子でない偽の娘風美を育てさせられたことが込められている。改題されたことで、作者の意図がより明確に読者に伝わるようになっていく。『カッコウの卵は誰のもの』という表題には、血のつながっていない親子の物語という連想が働くような仕掛けがあり、それが程度は効果を上げていく。托卵するカッコウと同じようなことが人間社会で行われたなら、親は誰であり、子供はどのような要素を引き継ぐかということが問われている。表題に関連するが、鳥越克哉は柚木に「カッコウつていう鳥は、ほかの種類の鳥の巣に自分の卵を産むぞうだ。モズとかホオジロとかのさ。そうして、雛を育てさせる」と述べた後、「カッコウの卵は俺のものじゃない。伸吾のものだ。伸吾だけのものだ。ほかの誰のものでもない。柚木さん、あんたのものでもない」と伝える。ここには遺伝的な資質よりも、本

人の自主性を尊重すべきであるという鳥越のメッセージが込められている。また、緋田は娘風美のスキー選手としての姿を見て、「カッコウの雛に罪はない」と思う。ここには育ての親としての万感の思いが込められている。風美と伸吾は、共に父親のスポーツ遺伝子を受け継いだかもしれないことが、悲劇の発端として作品内では機能している。その意味では、二人共にスポーツ遺伝子にまつわる犠牲者とも言える。なお、風美の才能については後で、生みの親である畑中弘恵譲りのFパターン遺伝子に依ることが明らかになる。

『カッコウの卵は誰のもの』では結末に至るまで、推理とサスペンスのストーリーは高まりを見せている。脇役と思われるいた上条文也が計画犯で鳥越克哉が実行犯という、結末での想定外の展開も巧みである。ただし白血病（註）の文也が、母に真実を知らせたくないためにバス事故を起こして風美に怪我をさせてドナーとして失格にさせるという動機のところになると、底が浅い印象も残る。父親を憎悪する文也の言動が、少し説得力に欠けるのである。また、鳥越克哉が、息子に自由をもたらすために、金と引き換えに起こした行動も底が浅い印象を残している。作品全体としても、あまりに巧みに作られ過ぎたストーリーであるために、推理小説としての結末に強引に導いていると取られても仕方があるまい。登場人物の内発的な言動というよりも、全能の作者によって登場人物が操られているという印

象が強い。もともと作品全体として見れば、スポーツ遺伝子という科学的な信憑性を取り込むことで、リアリティも獲得している。

構成としては、緋田夫婦に象徴されるように明るくて幸せなシーンを冒頭に描いた後、急転直下で緋田の妻の自殺や風美への脅迫などの事件が描かれ、次第に悲劇のドラマの内実が暴露されていくことになる。風美の本当の親はいったい誰なのかということを描き推測する形で、読者も作品の中に引き込まれていく。作品全体としても、予想外の物語展開を随所でしているが、それが納得のいくものであることの説明が巧みに成されている。客観的な第三者的な視点で描かれることで、全ての登場人物が自在にコントロールしていることが、短所であるのみならず長所としても働いている。

読者との知恵比べに作者の最大の関心はあるとも言え、作品を通して明確な思想を読者に伝えるということは必ずしもメインとは言えない。緋田宏昌と風美、鳥越克哉と伸吾、上条伸行と文也の三種類の親子を登場させて、親子のつながりの在るべき姿が問われている。テーマは親子の絆ということであろうが、それをスポーツ遺伝子の発掘や功罪ということに絡めている。親子の絆というテーマが、従来とは違って遺伝子の分析に絡めて追求されているところに本作品の特質がある。生命科学が進展する近未来社会への洞察にも、作者の限らない関心が窺

える。スポーツ遺伝子に着目して英才教育を行うことは、当然予見される近未来の人類の姿であろうが、果たしてそれがあるべき姿なのかという問いかけがある。人の自由を束縛して、操り人形のように優れたスポーツ選手を育成することの是非が問われている。

三

次に『プラチナデータ』について見ていきたい。表題の「プラチナデータ」には、白金のように極めて貴重な情報・資料ということ、国民すべてのDNA情報ということが寓意されている。結末では、そのデータが実は一部の特権階級の情報については、捜査対象外になるように設定されていることが明らかになる。そのような意図的に仕組まれた欠陥を修正するものが『モーグル』というプログラムである。

犯罪防止を目的としたDNA法によって、遺伝子情報が国に管理される現実を刑事の浅間は見ることになる。「国会に、犯罪防止を目的とした個人情報取扱いに関する法案——通称DNA法案が提出されたのだ。本人の同意を得て採取したDNA情報を、国の監視の下、捜査機関が必要に応じて利用できるようにする法律」とあるように、近未来の情報管理社会が舞台という設定である。本人だけでなく血縁者が犯罪を犯しても、DN

Aによって犯人を特定できるというところが近未来社会らしいところである。しかも、近未来といっても近い将来起こり得る可能性があるというリアリティも獲得している。

浅間は国によるDNA情報管理システム自体に否定的である。「このシステムが人間を幸せにするものだとはどうしても思えなかった。彼は子供の頃に読んだSF小説を思い出した。国民全員にICチップを埋め込み、どこで誰が何をしているのか、国家が嚴重にチェックしているという物語だった。気味の悪い話だと思った。だが個人のDNA情報を国が管理するというのは、それと同じことではないのか」と思う。浅間は刑事でありながら、検挙率が上がることよりも、国による行き過ぎた情報管理に疑問を持っているのである。浅間の性格としては少し攻撃的で短気なところもあるが、それでも刑事という職業のモデルタイプとして造形されており、そこに物足りなさも残る。例えば東野も愛読した松本清張^{まつもと}のように、犯人を追う側の人間性にも少し立ち入って個性的な人物像として描くことが望まれる。

浅間とは逆の考えを持っているのは、警察庁特殊解析研究所の神楽である。「人々を管理保護したいなら、遺伝子を把握するのが一番手っ取り早いんです。管理されるのは嫌だというのは子供の考えです。自分も管理されるが、他人も管理されている。つまり他人から危害を加えられるおそれが減る。そのメ

リット」と捉えている。神楽は極めて合理的でドライな考えの持ち主である。少年期に父親の自殺というトラウマを抱える神楽は、心や脳や細胞について思索を深める。そして最終的には、人間と機械の違いを説明しようとして遺伝子に辿り着く。「遺伝子の謎を解くため、勉学に励んだ。大学では遺伝子工学と生命工学を専攻した。人間と機械の違いは何か——そのことが常に頭にあった。二十一歳の夏、神楽はついに一つの結論に達した。人間の心は遺伝子によって決まる、というものだった。これはすなわち、人間と機械は本質的には何も変わらない、という結論に至る前章でもあった」のである。神楽は遺伝子が人生を決めるプログラムだという信念を持つことになる。神楽の台詞に、遺伝子は「人生というプログラムの根幹を成すものだと思っっています。人間は生きていくうちに様々な情報を与えられ、時にはそれに修正を加えたりしますが、どの情報を人生に生かし、どの情報を殺すかは、結局のところ本人に与えられた初期プログラムにかかっていると考えています」とある。遺伝子決定論者であり、ここには神楽という人物の内実が顕著に示されている。ただし、後に逃亡する中で、神楽は芸術家としての父親や手作業の持つ意味について認識を深める。「自分は間違っていたのかもしれないと思った。遺伝子は人生を決めるプログラムだ、というのが持論だった。人の心も遺伝子という初期のプログラムによって決まると信じていた。今、その考えが

激しく揺れていた」と変化する。それは、機械的にプログラムされたものよりも、芸術という人間の精神を傾けたものへの理解の深まりと密接につながっている。つまり人間の心や芸術というものも、データ分析等によっては捉え難いところがあるという認識である。ただし、信じられるのは科学か自分自身かという苦悩としてではなく、科学への信頼から芸術への目覚めと余りにもスムーズに移行しているところに物足りなさもある。

神楽は二重人格であることを自覚するが、もう一人の存在はリュウという人格である。神楽がリュウの「存在を意識するのは、遺伝子と心という命題を研究する時だけ」である。つまり、人間を神楽は遺伝子によって構成された存在という視点で捉えており、リュウは心を持った存在という視点で捉えている。もともと、精神科医の水上教授の説明に依ると、「リュウを作りだしているのが神楽君の脳である」ので、リュウという分身はあくまで神楽の幻想という捉え方もできる。管理社会の権謀術数の中を論理的に割り切って生きる神楽とは違って、芸術等によって癒されたい時にリュウは表面に現れる。それは精神科医の水上教授が浅間に語った言葉に依れば、「多重人格とは、自分が何者かという自意識が揺らぐ病気です。原因は様々ですが、少なからず、現実からの逃避、虚構の世界への憧れといった心理が影響しています^{注4}」ということになる。リュウが絵を描くのは、「魂の解放」を求めている故である。手の絵を描くのは、

手が芸術活動の本質に密接に関わるからである。つまり、暮礼路で神楽がサソリから教わったように、「いいものを作ろうとか、誰かの真似をしようとか考えないことだ。思いは必ず手に伝わる。その手が土を形作る」ということである。機械によるデータ化した作業よりも、人間が自らの手で心を込めて創り出すことが大切だというのである。また、「差別も戦争も犯罪もない国。人々は自然に敬意を払い、皆で手を取り合って生きている国」(傍点引用者)、つまり手は連帯もイメージしているのである。このように〈手〉は〈遺伝子〉や〈DNA法〉や〈二重人格〉等と共に、この作品におけるキーワードと言える。

アメリカから協力を来た白鳥里沙は、神楽からDNA解析を職業とした理由を問われ、次のように答える。「アメリカで初めてDNAプロファイリングが実用化された時、子供心に思っただけです。これからは何かもが管理されるようになるって。偽造カード、偽名、偽造パスポート、どんなものを偽造しても意味がなくなる。生きているかぎり、遺伝子は偽造できない。それを国家が管理するということは、人生を支配されるのと同じことです。自由なんて言葉にも意味がなくなる」と述べる。DNAは究極の個人認証システムとして、個人の自由さをも束縛しかねないというのである。社会の諸事象がDNAによって管理される時代の到来を、白鳥は予見していたのである。白鳥の言動にアメリカのDNA戦略を絡めることで、その

言動に説得力が付け加えられている。ただし、女性像としての具体的な描写は私生活を含めて淡泊で、記号的な要素の方が強いところに物足りなさもある。

なお、登場人物は浅間や神楽や蓼科などほとんど山に因んで命名されているが、それが効果を上げているとも言えない。むしろ、個性的なキャラクターとして描き分けるための寓意性に欠けるし、作品の内容との相関性も乏しいと言えよう。これらに比べると、「暮礼路」という地名は、神秘的、ユートピア的な空間を連想させて効果的である。

作品の結末では、読者の予想を越える形で水上教授が犯人として表に出て来ることになる。この奇抜とも言えるストーリー展開の巧みさは、東野の得意とするところである。神楽の二重人格者であるリュウが描いた手の絵が、謎を解く鍵であるというストーリー展開も卓抜である。ただし、殺人の動機としては、水上教授の心理の掘り下げが十分に為されているとは言えない。NF13という連続殺人事件の犯人を分からなくすることや特権階級の極秘データを守るためというのでは、必ずしも説得力があるとは言えないだろう。水上は神楽に「人の心は、単なる化学反応と電気信号に過ぎない」と言う。このような複雑に屈折した要素を持つ人物として、伏線も含めて説得力に欠けるのであり、水上に家族がいるかどうかさえ不明である。神楽が水上に「あなたは異常者だ」と言うが、重要人物の水上の言

動について、そのように片付けて済ますわけにはいかないのである。ここには殺人を対他関係の極北に位置させる思考が働いているとは必ずしも言えず、推理小説特有の謎解きの要素の方が強い。

なお、『ブラチナデータ』の神楽とスズランの会うシーンや逃避行のシーンはファンタステックな要素が強く、叙事的な本作における癒しとして機能している。テレパシーによって神楽に会いに来るスズランは、神楽の中の癒されたい願望の膨らんだものという捉え方もできる。それは逃亡と真実探求に明け暮れる神楽にとつての救いであるだけでなく、息詰まる展開に緊張を強いられる読者にとつても癒しとして働いている。神楽が辿り着いた暮礼路の僻地は、管理されることを嫌って都会から逃れてきたナチュラリストが住んでいるユートピア的な空間である。最終章では、そこで暮らす神楽の平穏な姿がさりげなく描かれていて効果的である。なお、結末のところでもスズランの正体は蓼科早樹であることが明らかにするが、これはいくらリュウの幻覚であるとは言え、強引な結着の付け方であろう。神楽の別人格としてリュウを設定したのと同様に、蓼科早樹の別人格としてスズランを設定したという意図は理解できても、唐突であることは免れ難いだろう。

東野は『ブラチナデータ』について『東野圭吾公式ガイド』の中で、「一つの肉体を共有しながら、リュウには見えるけれ

ど神楽には見えないものがある。それは一体何なのか。なぜそういうことが起きるのか。それが本作のテーマであり、仕掛けられた最大の謎だともいえる」と述べている。「リユウには見えるけれど神楽には見えないもの」とは、芸術の意義や価値である。それは、神楽が「芸術という言葉は、彼にとっては白いカーテンだ。その向こうは見えずで見えぬ。じつは何もないのではないか、という疑いが常に頭の隅にある」と思うところなどに端的に示されている。神楽の芸術不信という考えに信憑性を持たせるために、陶芸家であった父昭吾が義手ロボットに敗北したエピソードが具体的に記されている。なお、文学作品というものは作者の意図を越えて存在するものであり、東野が『ブラチナデータ』のテーマについてこのように言及したからといって、それがそのままこの作品のテーマであるということにはなるまい。

『ブラチナデータ』には、現代の科学文明、特に遺伝子情報を人間社会においてどのように活用することが幸福につながるかという真摯な問いかけがあり、それがテーマとも言える。ミステリーの要素だけでなく、DNAが管理された近未来の社会について考えさせるところがある。生命科学が進展する近未来社会を設定することで、『カッコウの卵は誰のもの』と同様に東野の未来社会へのあくなき関心や洞察が、物語の形をとって巧みに表出されている。

四

『カッコウの卵は誰のもの』も『ブラチナデータ』も、近未来の状況を作者の想像力によって巧みに描き出している。もともと、現代では事実と虚構の関係は捉えにくくなり、すべては情報の枠内に組み込まれるとも言える。事実も虚構も情報に照らして捉えれば、同様の事柄の表裏なのである。高度情報化社会である現代では、小説の中に情報を求めようとすると読者の志向は強まっており、東野の作品はそのような読者のニーズにも合致している。作家としての東野は、書き手である本人さえもが、この情報化社会のシステムによって造られた存在であるかもしれないという認識から作品を書いていると思われる。

東野の作品は大衆文学と捉えられるが、大衆文学においては読者はただ単に受動的な存在であるとは言えない。読者は自ら創作する側に働きかける主体でさえある。作者の内発的な発想の中にさえ、暗黙の内に想定された読者の声が入り込んでいる。東野の場合、読者との知恵比べにおいて勝ろうとしていることは、読者の反応や推理を予想しながら、更に読者の一ランク上を行く想定外の結末に至るところに顕著に示されている。ミステリー作家として巧みに伏線を張りながら、予想外の結末に読者を導く筆力は優れている。想定外の結末によって、読者に考えさせ、あるべき未来について思索を深めさせようとする

手腕は巧みである。

客観的な第三者的な視点にすることによって、どの人物の言動や心理も描写されている。ストーリーにリアリティを持たせるために、細かな小道具や登場人物の些細な言動も目配りよく表出している。もともと登場人物の内面描写は極力避けて、スピード感のあるストーリー展開をするところに東野作品の特質はある。内面描写よりも会話の場面を重視することで、テンポの良い物語作りに成功している。また、構成としては複数の場面を交互に同時並行的に描き、スピーディな展開としている。それらは、映像化に適した作品作りであるとも言える。そこにはストーリー展開の巧みさと共に、あざといストーリー展開ゆえのわざとらしさも窺える。

東野作品の問題点としては、第一に登場人物が平板に描かれていて、奥ゆきや深みに欠けるところがある。人物像がいかにもその分野の職業人らしくステレオタイプの人物として造形されている。果たして登場人物に性格と呼べるようなものが付与されているだろうかという疑いが生じることもある。その根底には、そもそも作者が人間の性格ということはどう考えているのかということにまでつながっている。更に、作中人物の痛みを作者がどれほど共有し得ているのかという疑問も生じる。第二にストーリー展開については、結末で急転直下の謎解きが表示されるが、それが必ずしも説得力を持つていたとは言えない場

合もある。読者の意表を突くドラマチックな展開ではあっても、それまで描かれた登場人物の言動から判断して少し無理が生じているところもある。第三に全能の作者が、巧みにストーリーを展開するところに感心せざるを得ない一方で、あまりにも話が出来過ぎているゆえのわざとらしさを覚えることも否定できない。描かれた登場人物は、全能の作者によってコントロールされた操り人形のように見え、登場人物自身の内発的な言動に乏しいと言える。登場人物は作者によってコントロールされた物語展開を着実に遂行するが、必ずしも魅力的な人物像とは成り得ていない。これらの要素が、東野の作品が時代の流行とはなり得ても、時代を代表する傑作とはなり得ていない由縁であろう。

ところで、サスペンスとしてのストーリーを展開する中で冷酷な殺人事件も描写される。そこには倫理的な要素は希薄であり、人間疎外といった現代社会の状況が反映しているとも言える。もともと生命科学の進展によって引き起こされる倫理的な側面については、東野はかなり注意深く配慮し、場面設定を行って^まいる。

巧みなストーリー展開によって、推理とサスペンスの世界を作り上げていた東野は、生命科学の知見を取り込むことによって、作品としてのリアリティを獲得している。新たな科学の知見もいずれ風化することは免れ難いだろうが、作品としてス

ピード感のある新たな時代の感性としても表出しているところは注目すべきだろう。それは、従来の文学の在り方への果敢な挑戦として捉えることもできる。

東野は最先端の生命科学等によって、人間の近未来社会がどのように変容するのかというところに強い関心を示している。それは重層的で複雑に入り組んだプロットの中で、読者への切実な問いかけや予見として表出されている。更に言えば、科学文明を駆使する我々はどこから来てどこへ行くのか、ヒトとはどういう存在なのかという深遠な問いにもつながっている。生命とは何か、人間存在とは何かという従来なら人文科学が扱うべき問いに、進歩した近年の生命科学は具体的な一つの解答を提示してきた。それを、東野は推理とサスペンスの物語として独自に作り変え、文学作品として世に問うている。東野作品には、現代における文化的状況の質的変化が如実に反映している。推理とサスペンスの作家という言い方では捉えきれない由縁であり、その筆力や想像力は高く評価されるべきだろう。

勉 田 和

注1 乙木一史は『東野圭吾全小説ガイドブック』の中で、『カッコウの卵は

誰のもの』について「本書で登場する柚木洋輔のように、現在、運動科学の研究者が注目している存在、それがスポーツ遺伝子だ。オリンピックなどで活躍した選手には、『血液のヘモグロビンが通常より多い』

『持久力が強い』等の形質を発現させる遺伝子があることが、最新の遺

伝子研究によってわかりつつある。東野圭吾は、そうした最新の研究を活用し、スポーツの才能が単に一つの遺伝子の有無ではなく、複数の遺伝子の組み合わせのパターンによって発現することも小説に盛り込んでいる」と述べている。

注2

白血病の骨髄移植について、緋田宏昌はインターネットで調べて、「他人の場合、白血球の型が数万人から数百万人に一人しか適合しない」「兄弟姉妹の場合だと、四分の一まで確率が上がる」ということを知る。同様の内容はウィキペディア「骨髄移植」や野村馨監修『家庭の医学』（成美堂出版）等にも記されており、このような知識を踏まえて作品が作られたことが分かる。つまり、上条伸行が長男文也の白血病を治すために、適合率の高いドナーとして娘風美を必要としたと展開したところである。

注3

『もっど！ 東野圭吾』所収の年譜の16歳の所に「松本清張などミステリ作品を読みふける」とある。

注4

水上のこの台詞について、多重人格者の神楽が危険な徴候を示しているので診察を要するという、いわゆる会うための方便として述べている可能性については、この時点では考慮する必要はないだろう。

注5

日下三蔵は「理系脳としての東野圭吾作品を読む」（『もっど！ 東野圭吾』）の中で、「提示された『謎』や『状況』をゲームのように理詰めで解いていく快感を東野ミステリの一方の核とするなら、生身の人間が生み出すドラマのリアリティが一方にあり、両者が緊密に一体化しているのが東野作品の特長といえる」と述べている。